

# 英国パブリック・スクールにおける 課外活動の今日的意義

古阪 肇

キーワード：英国パブリック・スクール、課外活動、紳士養成校、進学準備校

【要 旨】 英国独立学校は、政府からの独立経営を行う私立学校に属している学校群である。独立学校に在籍する生徒は同学年全体の約7%程度であり、その代表格である英国パブリック・スクールが伝統的に紳士を育成する進学校の役割を果たしてきた。

ところが近年、時代の変化に伴って、独立学校はいわゆる「紳士養成校」としてより「進学準備校」としての役割をより求められる傾向が強くなってきている。特にサッチャー政権時代に打ち出された1988年教育改革法が与えた影響は大きい。同改革法により、各学校の学外試験の成績が順位表として公表されるようになると、殊に中等学校入学前の児童や保護者からの注目が成績順位表に集まり、各校進学希望者数へ直接影響をもたらすようになった。このことがひとつの理由となり、学校側も必然的に対策措置としてアカデミックな教育の推進を重視するようになったと考えられる。

その結果、英国独立学校でも多くの学校が、入試選抜の時点でアカデミックレベルの高さを重視して、生徒を厳選するようになった。しかし、当該校ではアカデミックな教科のみならず、現在でも進学試験には直接関係のないスポーツや音楽、演劇、その他の活動にも極めて積極的である。実際に近年の学力至上主義ととれる大学進学を主目的とした教育方針の中においても、独立学校においては多岐に亘るスポーツや芸術をはじめとする非アカデミックなカリキュラムが実施されている。

本稿では主にザ・ナインと呼ばれる主要パブリック・スクールに焦点を当て、当該校におけるextra-curricular activitiesと呼ばれる課外活動の多様性や活動の実態について論証している。また本研究を通して、「進学準備校」としての役割を担う今日の当該校で重視される多様な課外活動が、多くの場合進学にとっても有益であり、その後の人生においても重要な役割を果たしていることが明らかになった。

## 1. はじめに

イートン校やハロウ校などで有名な英国のパブリック・スクールを含む学校群は、英国でインディペンデント・スクール、すなわち独立学校と呼ばれる<sup>1</sup>。英国独立学校は、政府から独立した予算で運営され、また国定のナショナル・カリキュラムに沿った授業を行う義務のない私立学校のカテゴリーに属している。複線型の学校体系をとる英国では、公立と私立は初等教育の段階から分離しており、就学前教育から大学準備段階のシックスフォームまで私立に学ぶ子どもも多い。独立学校は同学年全体の約7%程度であり<sup>2</sup>、また学費も公立の場合は無償であるのに比して、独立学校は非常に高額である。2014年度の調査によると、当該校における寄宿制の平均が、年間28,788ポンド、通学制でも12,723ポンドの計算になる<sup>3</sup>。このような特徴を持つ独立学校ではパブリック・スクールを中心に、経済的に豊かな家庭の子どもに対し、伝統的に紳士を養成す

る学校としての役割を果たしてきた。

ところが近年、時代の変化に伴って、独立学校はいわゆる「紳士養成校」としてより「進学準備校」としての役割をより求められる傾向が強い。特にサッチャー政権時代に打ち出された1988年教育改革法が与えた影響は大きい。同改革法により、各学校の学外試験の成績が順位表として公表されるようになると、殊に中等学校入学前の児童や保護者からの注目が成績順位表に集まり、各校進学希望者数へ直接影響をもたらすようになった。そのため、学校側も必然的に対策措置としてアカデミックな教育の推進を重視するようになったと考えられる。

しかし、当該校におけるカリキュラムに注目すると、アカデミックな教科のみならず、スポーツや音楽、演劇、その他の活動にも極めて積極的な様子が窺える。実際に、近年の学力至上主義とともとれる大学進学を主目的とした教育方針の中においても、スポーツをはじめとする極めて多岐に亘る非アカデミックなカリキュラムが充実している。イートン校やハロウ校では、ハウスごとの創作演劇や音楽コンクールにも極めて熱心である。このように、独立学校の歴史の中において、バランスの取れたカリキュラムは当該校の特徴を示すものである。だが大学進学を何よりも重視する昨今においても、このようなカリキュラムの編成は今日まで維持されてきている。

本稿では、調査対象校として主に、実際に昨年面接調査を行った3つの英国パブリック・スクール、すなわちウィンチェスター校 (Winchester College)、シュルーズベリー校 (Shrewsbury School) およびハロウ校 (Harrow School) を含むザ・ナイン (The Nine) と呼ばれる主要パブリック・スクールを取り上げる<sup>4</sup>。当該校における課外活動 (extra-curricular activities) に焦点を当て、独立学校において現在でも変わらず支持され、重視される非アカデミックな課外活動の多様性とその実態について、明らかにすることを目的とする。また、「進学準備校」としての役割を担う今日においても、当該校が課外活動を重視する意義についても検討する。

これらの学校は、大学進学率も高く、学業成績も上位に位置する学校群であり、独立学校の中で「平均的」な学校の事例であるとは言えないが、「代表的」な伝統校という意味において、独立学校を代表する学校群として捉えることができるであろう<sup>5</sup>。

## 2. 英国パブリック・スクールにおける課外活動

現代の独立学校における課外活動に特化した先行研究については、管見の限りにおいて、非常に限定的である。海外の研究としては、独立学校における課外活動において特徴的な、家畜の飼育やビーグル犬を使ったウサギ狩り、その他の狩猟や射撃に関する活動内容について言及した報告が2004年の文献にあるが、その他の課外活動に関する論文は概ね、特に当該校に特化して記述されたものではない<sup>6</sup>。課外活動に関する先行研究の代表的なものとしては、主要学術ジャーナルを対象に定量的研究の手法を用いて文献調査を実施し、課外活動が教育成果の向上に有効か否かについて論証した論文がある<sup>7</sup>。その他、独立学校に関して項目を分けて説明している概要書や、元教員等学校関係者が自身を基に著した随筆等において、課外活動が紹介されている文献は歴史書においても多く見受けられる<sup>8</sup>。

一方、日本国内では、独立学校の課外活動に関して、課外活動としてではなく、スポーツに焦点を当てた先行研究が見られる。中でも近年では、鈴木と阿部の研究が最も代表的なものである

と言えよう<sup>9</sup>。

しかし、先行研究において、現代の独立学校における課外活動全般にわたって詳述された文献は見当たらず、非常に広範囲にわたる独立学校の課外活動がどのような範囲におよぶものであるのか、また現状ではどのような活動が行われているのかについて整理分類することは、現代における独立学校の一側面を明らかにする上で意義深い。また進学重視の傾向の中で、課外活動に積極的に取り組む意義について関連文献をもとに考察を加えることについても、学力試験一辺倒ではない受験のあり方を考える上で、日本の大学受験システムに一定程度の示唆を与えるものとなろう。

では、英国における独立学校の課外活動とはどのようなものであろうか。たとえば我が国における「特別活動」に類似するものであるのか。日本においては、文部科学省が定める学校指導要領に「特別活動」に関する記載があり、特別活動の定義や活動の範囲について規定が詳述されている。ザ・ナインの学校群は、主として13歳から18歳に相当する年齢層であることから、日本の中学校および高等学校に相当する。現行の中学校における特別活動は「学級活動」「生徒会活動」「学校行事」から構成され、また高等学校は「ホームルーム活動」「生徒会活動」「学校行事」に該当する活動を指す。「生徒会活動」および「学校行事」については、中学校・高等学校において共通して「特別活動」を構成する要素となっている。さらに、平成20年7月に改訂された中学校学習指導要領解説「特別活動編」や、同じく平成21年7月に改訂された高等学校学習指導要領解説「特別活動編」によると、4つの章立てで特別活動に関する解説が詳述されている。第1章がそれぞれ現行の「特別活動」へ改訂された経緯等について、第2章が特別活動の目標、第3章が各活動や学校行事の目標・内容、そして第4章が指導計画の作成と内容と取扱いについて、と明確に記載されている。

日本における「特別活動」と英国の「課外活動」は、一定程度の類似性を有し、学校行事を活動の一部に含むという共通項が見出せる。しかし、全体的な活動内容や設置基準は大きく異なっているようである。日本の特別活動は、その内容が文部科学省によって明確に定められ、国定のカリキュラムに組み込まれたものの一部である。一方、英国の課外活動の活動範囲や設置基準については、各学校によって様々に異なっており、国によってその定義が設定されているわけではない。

では、どのような課外活動がそれぞれの学校で実施されているのか。それについては、学校によって異なっていると推測される。また、日本での学習指導要領にあたる、ナショナル・カリキュラムにおいても、課外活動（extra-curricular activities）について言及されていない。したがって、課外活動がどのようなものであるのかについては、以下のような定義と方法により探究していくこととする。

第一に、課外活動はアカデミックな科目には含まれないものであり、さらに教科外活動に当てはまるものであると定義できる。この点から、独立学校ではナショナル・カリキュラムを踏襲したカリキュラム構成にする義務はないが、ナショナル・カリキュラムにおいて教科として挙げられているものは独立学校の課外活動に当てはまらない、という仮定を立てることとする。そして第二に、具体的にザ・ナインの各学校において、extra-curricular activitiesの範疇をどのように捉

え、紹介しているかをウェブサイト上から調査し、課外活動の実態を浮き彫りにする手法を用いる。

まず、英国の中等教育段階に相当するキーステージ3（11～14歳）あるいはキーステージ4（14～16歳）において、ナショナル・カリキュラムで挙げられている科目は、表1のようになる。なお、○印を記入している部分がナショナル・カリキュラムにおいて必修の項目である（表1参照）。

表1 中等教育段階におけるナショナル・カリキュラムの必修教授項目

	キーステージ3（11～14歳）	キーステージ4（14～16歳）
<b>コア教科</b>		
英語	○	○
数学	○	○
科学	○	○
<b>基礎教科</b>		
アートデザイン	○	
シティズンシップ	○	○
コンピューター	○	○
DT（デザインテクノロジー）	○	
現代外国語	○	
地理	○	
歴史	○	
音楽	○	
PE（保健体育）	○	○
<b>その他</b>		
宗教教育	○	○
性と恋愛関係の教育	○	○

（出典：2014年改訂のナショナル・カリキュラムより筆者作成）

表1に示したように、コア教科が国語、数学、科学の3科目、そして基礎教科が、アートデザイン、シティズンシップ、コンピューター、DT（デザインテクノロジー）、地理、歴史、外国語、音楽、PE（保健体育）の9科目である<sup>10</sup>。すなわち、これら12科目は教科であり、課外活動の対象外とみなすことができる。なお、基礎教科の中でシティズンシップ、コンピューター、PEの3科目は、キーステージ4でも必修科目であり、その他の基礎教科はキーステージ3のみで必修となる。また、キーステージ3のみで必修となっているアートデザインや音楽は、教科として教授され、16歳時点で受験する公の試験、GCSEにおいても教科として課される科目である。アートデザインやDT、音楽は芸術科目とされることから、後述する課外活動において行われている音楽や美術と重複あるいは混同されないよう注意を要する。課外活動における芸術の時間はアカデミックな要素から切り離され、大学進学に必要となるGCSEやGCE・Aレベル試験（以下、Aレベル試験と記述）においてテスト問題が課される類の教育活動には当てはまらない<sup>11</sup>。

なお現在、宗教教育および性と恋愛関係の教育（sex and relationship education）についても両キーステージにおいて必修となっている。

次に、ザ・ナインの各ウェブサイト参照の上、各学校がどのように課外活動を捉えているのかについて、表2にまとめた（本稿最後部、表2参照）。その結果、各校によって課外活動の捉え方が様々であることが分かる。具体的にextra-curricularという用語表現を用いて課外活動について説明を加えている学校は、9校中チャーターハウス1校のみである。しかし、他の8校においても、チャーターハウスが課外活動の内容として紹介していることと同様の活動について記載しているため、9校全般において、類似する活動内容を各校が課外活動として捉えていることが判明した。

なお、チャーターハウス校では、具体的に課外活動として、CCF（Combined Cadet Force；軍事教練）やPSHE（Personal Social and Health Education；人格的社会的および健康教育）、スピーチコンテストの準備や文芸活動、美術・音楽・演劇に代表される創作活動や芸術活動、労働体験、スポーツ、環境保全活動、エジンバラ公アワード（The Duke of Edinburgh Award、以下DofEと表記。）、社会福祉や慈善活動に関わるボランティア、高齢者や年少者のサポート支援、国内外における遠征や研修等、広範囲にわたる活動を挙げている<sup>12</sup>。

またチャーターハウスの例に則って他の学校について見ると、各学校がどの項目で課外活動の内容について触れているかは、表2の大項目に注目すると様々に異なっていることが分かる。たとえば、イートン校では、「カリキュラム」の項目の中に含まれているが、ラグビー校においては、「ボーディングスクールライフ（寄宿生活）」の項目に課外活動に関する情報が収められている。

ただし、学校によって、同じ課外活動として捉えられるものの中で、特に何を重視するかについての相違は見られる。たとえば、シュルーズベリー校は、音楽や演劇に関する情報はあるものの美術に関する活動はそれほど積極的ではなく、対照的にスポーツやアウトドアに関連した課外活動に関しては、非常に多岐にわたる活動が展開されていることが窺える<sup>13</sup>。一方ウェストミンスター校は他校に比して課外活動が控えめな印象を与えるものの、シックスフォーム生を対象にした課外活動には熱心で、アカデミックな活動を中心としたソサエティの展開には積極的である。長期休暇における職業体験などをサポートする体制を整え、大学の面接試験や内申に少しでも有利に働くような支援活動を行っているものと考えられる。

表1、2の結果から、ザ・ナインの課外活動は、公の試験が課されることのない芸術活動、特に音楽、美術、演劇を基本とする創作芸術に始まり、各種クラブ活動や福祉の意味合いが強いソーシャルサービスへの従事、CCFやエジンバラ公アワードという特徴的なプログラムや国内外の野外研修を包含した多岐に亘るものであることが分かった。一方、「スポーツ」をあえて「課外活動」と区別している学校も見られる。

### 3. 詳細な具体的事例について

前節では、主にザ・ナインの情報から英国パブリック・スクールにおける課外活動の範囲について概観的に整理した。しかしウェブサイト上のリソースを収集したものは、情報が限定的かつ



表面的であり、実際の課外活動がどのように展開されているかを詳細に把握することが難しい。そこで、本節では具体的に英国で面接調査を実施した3校について焦点を当て、当該校における課外活動の内容を詳述する。課外活動に関してどのような時間やプログラムが提供されているかという点のみならず、それぞれの学校における教育方針がどのように課外活動の展開に影響を与え、また学校関係者が帰属校の課外活動についてどのように考えているのかについてもアプローチし、当該校の課外活動をより立体的に捉えることとする。そのために、これら3校において「教育方針」、「学校便覧やウェブサイトから得られた課外活動における内容」、「面談調査から得られた課外活動に関する内容」という観点から3項目をまとめた。(表3参照のこと) 2013年に訪問した3校はそれぞれ訪問順にハロウ校、シュルーズベリー校、ウィンチェスター校である<sup>14</sup>。

表3 3校の課外活動に関する包括的詳細事項（修正箇所あり。紙媒体に記載）

ハロウ校	
教育方針	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学識や知的好奇心を高め、独立した思考や効率的な学習習慣を持たせる</li> <li>●圏内外の一流大学へ合格させる指導を行うこと</li> <li>●才能を見出し、個性を磨き、リーダーシップやチームワークを高めるために多岐にわたるハイレベルな特別活動の機会を提供</li> <li>●自己鍛錬、責任感、道徳心、品行方正な態度を身につけ、他者を思いやり、自身や学校に誇りを持たせること</li> <li>●伝統を守り、偉大な卒業生を想い、学校への帰属意識やプライドを持たせる</li> </ul>
学校便覧やウェブサイトから得られた課外活動における内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>●Music: 優れた音楽家の養成、高い音楽技術の習得、娯楽として等、それぞれの目的で音楽を学べる</li> <li>●Drama: 学校の劇団が2つあり、一つはミュージカル、もう一つはシェークスピア劇を有する。演劇プレゼンテーションを通して演劇への興味を持たせる</li> <li>●ハウスごとの演劇コンペあり。ウエストエンドへの観劇も定期的を実施</li> <li>●Sports: 様々あり</li> <li>●クラブ活動として、戦記研究、人権団体、北米研究、生物、ボードゲーム、チーズ研究、古典、自然保護、料理、アートシアター系映画、解剖、ディベート、エジンバラ公アワード、エッセイ、エンジニア、農業牧畜、フィッシング、聖書、地理、地政学、新聞、CCF、ヒンドウ研究、ユダヤ研究、法律研究、カトリック研究、登山、数学、メディア、中世研究、現代外国語、自然史、インド研究、東アジア研究、哲学、写真、経済ビジネス金融研究、不動産研究、慈善活動、演劇、科学、読書、執筆、中欧・東欧研究、美術史、歴史、馬術、クイズ、ベジタリアン、自然史他</li> </ul>
面談調査から得られた課外活動に関する内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>●アカデミックな教育だけでなく、美術、音楽、演劇同様、スポーツもハロウの教育の一部であり、それらの教育を通して全ての社会に感謝・貢献し、世界で活躍する万能な生徒を育成している</li> <li>●音楽や芸術は重要で、ハロウには素晴らしい環境が整っている。生徒はたくさん芸術活動に携わっており、アートを学ぶ望ましい</li> <li>●難関大学への進学も望ましいが、同時に素晴らしいスポーツマン、芸術家、音楽家となってくれることにも期待。万能に育ってほしい</li> <li>●ボランティアや慈善活動は自分たちの立場を考えた上で重要。歴史的にも重視されてきた</li> </ul>
シュルーズベリー校	
教育方針	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学ぶことへの厳格なアプローチ</li> <li>●多様な特別活動を備えること、また個々に対するパストラルサポートを行うことを重視</li> <li>●生徒が外に目を向け、物事を理解し考える力を持った人間に成長できる環境を提供すること</li> </ul>

学校便覧やウェブサイトで得られた課外活動における内容	<p>●スポーツの他に、音楽、演劇も盛んであるが、生徒らは様々なextracurricular activityを謳歌している●特別活動にはスポーツリーダー、ライフガード、カヌーコーチ、フィットネスインストラクターの資格を取れるプログラムもあり、シックスフォームの生徒にとっては、就職の際もgap yearを取る際にも役立てることができる●学校周辺の豊かな自然を生かしたアクティビティ、ウォーキング、登山、その他野外活動プログラム、料理、エジンバラ公アワード、CCF、自転車、デジタル写真、出版、スポーツリーダーシップ、ダイビング、奉仕活動、ベンチャー活動、クイズ等。●自然観察や奉仕活動を含む学習主体の海外研究●また公式行事がない限り、週末アクティビティプログラムへの参加も可●その分野での第一人者を迎えての講演会。●クラブ活動として、天文、歴史、養蜂、建築、ビジネス、チェス、キリスト教、古典、執筆、美術、科学、ディベート、フランス語、政治哲学、柔道、メディア、新聞、ワイン醸造（学年制限あり）、鳥類学、クイズ、会社（チャリティ目的）、テレビ、スペイン語、勉強、ゲーム、レーシングカーエンジニア他</p>
面談調査から得られた課外活動に関する内容	<p>●スポーツに限らず、生徒のリーダーシップ育成やあらゆることに興味をもつ機会を広く与えるため、できる限り多くのことが学べるような選択肢を設けている●CCFでリーダーシップを取るタイプの生徒ばかりでなくてよい。音楽や演劇で才能を発揮する生徒もあり、社交的でなければ演劇の裏方で貢献し、他の生徒との連帯感を強める子もいる●芸術、音楽、その他の活動は、生徒の成長過程において、創造的かつ文化的側面のはけ口となっている。生徒たちの中にはこれらの分野において非常に強みを発揮し、その分野において高みを目指そうとする者も見受けられる●芸術活動はスポーツと同様チームワークや、問題解決能力を高めるものである●ハウス対抗の音楽や演劇のイベントも然り</p>

ウィンチェスター校	
教育方針	<p>●生徒の知的で創造的な気づきを促進する●読書や討論を通してコミュニケーション能力を磨く●大学入学のみならず、人生の準備を行う●大学進学への情熱を高める●恒常的な謙虚さを身につける</p>
学校便覧やウェブサイトで得られた課外活動における内容	<p>●多くの課外活動が提供されている。●アクティビティに加えて世界的な著名人や音楽家を招聘してのイベントもあり。●時間の許す限り、生徒にはクラブ活動やアクティビティに参加することを奨励している。●多くの生徒がこのような活動の中で責任を果たし、活動グループをどのように組織、運営していくかを学び、非常に有意義な経験を積む。●学校は生徒が熱意を持ったことに対して何でもそれを高めていけるような機会を提供することを心掛けている。●多くの場合、努力は報われ、コミュニティ全体にとって利益となっている。●美術、ベル、読書、キリスト教、クレール射撃、CCF、DT、演劇、エジンバラ公アワード（Duke of Edinburgh's Award）、旅行、フィッシング、フィットネス、楽器アンサンブル、出版、ライフル、ダイビング、起業クラブ（Young Enterprise Company Programme）。その他、クラブ活動の中に、ロシア研究、スペイン語、チェス、古典、弁論、映画、天文学、社交ダンス、ラテンアメリカ文化、理論哲学、科学、古典文献鑑賞、その他</p>
面談調査から得られた課外活動に関する内容	<p>●ウィンチェスターではスポーツを重視しており、積極的に行うことが奨励されている。どんなスポーツでもひとつ行う必要がある。チームスポーツを行う必要はない●音楽も、スポーツ同様重要視している●多くのスポーツ好きの生徒と同様、音楽の才能がある生徒も大勢いる。ほとんどの生徒が、一つ以上の楽器を嗜んでいる。学校として、楽器を習うことを推奨している。●ハウスシステムが大事。ハウス対抗のアクティビティが多く、競争意識を持たせる●イベント事を通して上級生が下級の模範となるよう育成している。</p>

(出典：筆者作成)

表3を踏まえ、面接調査で伺った内容からそれぞれの学校における課外活動について次のように総括することができる。

まずハロウ校は教育方針として、第一に勉学の大切さ、進学的重要性を説いている。また、生徒を伸ばす機会を極力多く作るために多様なアクティビティを提供するとしている。同時に心の成長と、学校に対する誇りを持つことの大切さも掲げている。さらに、音楽、演劇、スポーツのいずれも非常に重視しており、それらをハウス対抗のイベントにしている。加えて、クラブ活動の種類も多岐にわたる。

面接調査におけるインタビューでは、大学進学的重要性と同様、音楽や芸術の大切さを強調していた。特に音楽は非常に重視していることが窺えた。また、ノブレスオブリージュの考えを有し、福祉活動や慈善活動に熱心に取り組むことも強く奨励されている。補足として、「音楽を長時間行うことは脳の発達にも効果的で、他の領域にもよく、生徒をより知的にすることができる」という話があった。これは、たとえば音楽と数学の相互関係などが挙げられる。学校の方針として「音楽や芸術はそれ自体にも価値を置いているが、それらを通して脳の発達を促すことや、一般的に、バランスのとれた善良な市民になるために役立つことでもあろう」という考えのもとで音楽やアートに対して積極的に取り組ませているということであった<sup>15</sup>。

さらに、ボランティアや福祉の側面に関して、「ハロウは学校として何に取り組むかという点が重要であり、また歴史的にもこれらに力を入れている。全生徒が慈善活動を通してコミュニティと繋がりを持っているが、このことも社会の一員として大切な役割を担っている。ハロウ校に学ぶ生徒の多くは富裕層の出身であり、また全員が特権的な教育を受けている。このような背景から、ハロウ校の生徒らが社会に目を向け、恵まれない人々のために活動をする責任があると考える人々も多いだろう」という考えのもとで、ソーシャルサービスの側面にも力点を置いていることが分かった<sup>16</sup>。

次に、シュルーズベリー校は、教育方針としては、学習の大切さ、アクティビティの大切さ、生徒へのケアの大切さを説いている。また、学校の便覧にはスポーツ、音楽、演劇に加え、課外活動も謳歌している、との表記がある。さらに卒業後に有用な課外活動についても紹介している。加えて週末の個人単位のイベント参加や多岐にわたるクラブ活動が行われていることが把握できる。

面接時における応対から、生徒の多様性に触れ、それぞれの生徒にあったアクティビティを行うことを重んじており、生徒一人ひとりの個性を非常に重視していることが窺える。同時に、応対者は、スポーツおよび芸術活動によるチームワーク、問題解決能力の向上、さらに寮制度の重要性について説いている。個人レベルのみならず集団生活の中で生徒を育成していくことの肝要さについて、認識レベルの高さを感じた。

最後に、ウィンチェスター校の教育方針は、大学進学やアカデミックな科目の重要性をことさらに強調している。実際に、オックスブリッジ（オックスフォード大学およびケンブリッジ大学）への進学率はハロウ校やシュルーズベリー校と比して2倍ないし3倍以上高く、卒業生の中でも両校の合格者は全体の3割を超えている<sup>17</sup>。しかし課外活動も奨励され、アクティビティも表3に見られるように多数展開されている。そして同校では知的活動に関わらず、生徒の興味関心を



高めるサポートを行う姿勢も積極的に取られている。

ウィンチェスター校は、生徒の有名大学への進学意識が3校中最も高く、また教育方針としても勉学への情熱を最重要視していることが、面接調査から窺えた。このスタンスは教育方針に合致している。しかし、同時にスポーツと音楽も重きを置いており、さらに、様々な催事、主にハウス対抗のイベント等を通して育成される人間形成も重視している点が特徴的である。

3校の共通点として、まず各校のインタビュー結果はそれぞれの教育方針に合致した内容となっていることが挙げられる。また、いずれの学校もアカデミックな科目の学習と大学進学を非常に重視しつつ、課外活動も重視している姿勢が見える。3校中、最も進学を重視するウィンチェスター校についても、課外活動への積極的な参加が奨励され、アクティビティやプログラムの充実ぶりも窺える。同校の教育方針では、アカデミックな能力の向上が強調され、また実際に面接調査の際にも、アカデミックな成果には最大の力点を置き、学校側、生徒双方が大学進学に対して非常に高いモチベーションを保持していることが見受けられた<sup>18</sup>。

学校側は、いずれも学校方針に則って教育を施し、アカデミックな科目のみに偏重しないバランスのよいカリキュラムの提供を心掛け、学力のみならず人間形成の側面からも、生徒の育成を心掛けていることが分かる。ザ・ナインをはじめとする英国パブリック・スクールは今日、「紳士養成校」から「進学準備校」へのシフトチェンジが図られてきているが、総じて現在もホリスティックな教育方針を保持し、実際にそれを実行しようとしていることが課外活動の実施状況から窺い知ることができる。

#### 4. 課外活動の今日的意義

前節により、各校は実際に進学を重視しつつ、非常に多岐にわたる課外活動を展開していることが窺えた。また、前節で取り上げた3校の事例から、進学に肝要なアカデミックな科目の取り組みとアカデミック以外の要素をバランスよく教育に取り入れることを重視していることが明らかとなった。しかし、「進学準備校」として有利であるとの考えから、保護者や生徒の独立学校への入学希望が増加している昨今、GCSEやAレベル試験の成績に直接関係のないこれらの活動が積極的に行われる理由としてどのようなことが考えられるのか。また、課外活動を行う今日的意義はどこにあるのか。伝統を重視する傾向の強い英国パブリック・スクールが、単純に伝統の維持を目的にこのような多岐に亘るアクティビティやプログラムを独自のカリキュラムに組み込んでいることが原因か否かについて検討することも、当該校における課外活動の現状について考察する上で重要な観点である。

英国紙ガーディアン (the guardian) をリソースとする記事に、「課外活動は試験結果を引き上げる」との見出しが見られる<sup>19</sup>。同記事によると、ISC (Independent Schools Council; 独立学校委員会、以下ISCと表記) が、「30以上の課外活動を提供している学校は、より良いGCSEの結果を生み出している」という調査結果を発表したという<sup>20</sup>。ISCによると、「課外活動への参加は生徒の自尊心を高めることが明らかとなった。また、教室外活動をより多く提供する学校はGCSEでよりよい結果を生み出していることが判明した」としている。詳細な結果は次の通りである。すなわち、「30以上の課外活動を提供する学校は、生徒のほぼ100%がGCSEの科目においてB評

価以上を取得しているが、20の活動を提供している学校はそれに比してB評価以上を取得している生徒が30%に留まっている」という。

この記事の記述部分だけを見ると30以上の課外活動を提供できる学校は、学校としての質が高く経済基盤が強固であり、必然的に在籍している生徒の質も高いからではないかという疑問が生じるが、その点の解明は今後の課題とする。

ISCの調査部長であるバーナード氏（Bernard, L.）は、アクティビティとテスト結果の相互関係は、選抜制の学校か否かに関わらず全ての種類の学校において当てはまっている、と報告している。実際に、本調査では、267の共学校、187の女子校、54の男子校における計12,551のアクティビティを分析しており、対象校は広範囲にわたる。同調査結果によると、統計学的に全ての種類の学校において意義深い関係性が見られるが、特に男子において上記のような成績結果の傾向が強く、学術論文とも合致している、と同氏は述べている。また、同調査から、課外活動への参加が生徒の自尊心を高め、うつを改善させ、ドロップアウト率を下げるとの結果が表れたという<sup>21</sup>。

このような一連の調査結果から、前述したように多くの課外活動を提供できる学校ほど、質の高い生徒が集まっている可能性があることが指摘できる。だが、課外活動の数が多く、生徒自身が個人の特技や興味にしたがって選択できる幅が広がれば広がるほど、彼らは自身の興味関心を高め、自信を深めたり、アイデンティティの確立を早めたりする結果に繋がりがやすくなるものと考えられる。この点は、現在大学進学に加えて、より喫緊の課題として学校で重要視されるようになってきている若年者の「心のケア」を考慮する上でも、看過できない課外活動の今日的意義として、認識を新たにすることができる。

一方、ガーディアンと同様に一般紙のテレグラフが提供する記事においても、大学進学と課外活動に関連する内容として注目に値する<sup>22</sup>。「エクストラな課外活動（extra-curricular activities）はエクストラな努力が報われるものである」と題された当該記事には、「新たなAレベルやIBの生徒は他の受験生と差をつけるためにも、課外活動の存在を重く見ることを考え始めるべきだ」というウォルムズリー氏（Walmsley, J.）の忠告が見られる。同氏によると、「もちろん受験に一番必要なのは、試験で求められた成績を取ることであるが、」と断った上で、「大学側が知る必要がある事項は、受験生がどういう人間であるかということであり、大学入試の選抜者は、受験生が教室外では何をやっているか、どのような課外活動を行っているかを知りたいのである」と課外活動の重要性について指摘している。

課外活動に関する記述は自己PRに必要な履歴書の30%の記述部分を占め、面接の際も同様のルールが適用される。また課外活動は、受験生の興味や情熱を実証するための手段である。このような前提から、教室外の時間をどこで費やすかについて、受験生には正しい判断が求められる。

ウォルムズリー氏は「課外活動は、活動の質が大切であり、曖昧に色んなことに手を出し過ぎるのではなく、アクティビティの種類を厳選し、それに時間を費やすことで、より利益が得られるものである」と忠告している。しかし、活動の選択については、打算的にすぎず、基本的には自身の興味関心にそって楽しめるものを選択するよう、次のような表現で勧めている。「課外活動は自分のアカデミックな関心とどこかでタグを組むべきかであるが、結局、アクティビ

ティとは自分が楽しむべきものであり、自己発見のための道具として使われるべきである。なぜなら、それらはあなた自身がどのようなことに対して本気で楽しめるのかを学ぶ機会を与えるものであり、またしばしば自分の望む人生の筋道を発見する最良の方法であるからだ」。

本記事の文責であるウォルムズリー氏は記者ではなく、実際に英国の高等学校において受験生に携わっている学校関係者である。そして氏自身が勤務する学校においては、アカデミックな科目を学習する時間と課外活動を行う時間を平等に分割し、4つの主要分野：環境、国際化、社会的正義、アウトドアについて、生徒が携わるように配慮しているという。加えて、毎年、卒業生や、大学の入試係のチューターから、学部で希望するコースを確定する際、生徒らが選んだ課外活動の経験が彼らの進路に影響を与えており、さらに、卒業生のキャリア選択についても課外活動の経験が同様に影響しているという。それを「社会的正義のプログラムを通して弱者と共にするボランティアを選択する多くの生徒が、その後慈善団体やそれに類似する機関に就職することが分かっている。さらに、リーダーシップや献身の精神が身につく、自分自身のキャリアの面で役立てることができる」と具体例を示して述べている。

つまり、課外活動は、自分の興味や情熱を実証するための手段であり、数ある選択肢の中から課外活動を選択することは、自分の楽しみを見出し、自分の望む人生の筋道を発見する最良の方法であると言える。さらに、大学進学後に専攻する学問や卒業後の進路にも、中等教育機関で選択した課外活動が影響を与えることも窺えた。ウォルムズリー氏は、「課外活動の選択がそのまま、生徒個人の教育、キャリア、人生の目標を見つけるベストな方法になりえることであり、その活動自体が6thフォームにおける生徒の生活において、なくてはならない非常に重要な事柄になるということである」と課外活動の選択の重要性について端的にまとめている。

同記事から、「進学重視」の傾向と「課外活動の奨励」が必ずしも対峙するものではないという点が指摘できる。すなわち、進学を重視することによって、必ずしもアカデミックな科目に偏重した勉強のために、課外活動が疎かになるという因果関係が成立するとは限らないことが推察できる。確かに大学進学のためには、GCSEやAレベル等、学外試験の対策が必要である。しかし、一方で課外活動を通して、生徒の精神面における充足感や自己発見、人間的成長、アイデンティティの確立が望まれる。さらに課外活動は大学進学の際の進路や大学卒業後のキャリア形成にも影響を与えるものであり、その上、大学受験の際に必要な履歴書や大学によっては面接試験にも重要な役割を果たすものであることが確認できた。

なお、数ある課外活動の中でも、たとえばエンジンバラ公アワードのように、銀賞や銅賞のレベルを達成することで得られる資格が、大学入試の際に直接有利になる類の課外活動が存在することも特筆すべき点である。

ただし、本節で取り上げた記事については、調査の前提となるアクティビティの定義と範囲について言及されていない点が懸念される。また後者の記事においては、課外活動の経験が卒業後のキャリア選択に影響を与えることが十全理解できるものの、それが全ての生徒に対して当てはまるとは考え難い。課外活動の種別に対する積極的な選択者と消極的な選択者によっても結果が異なることが予想されるが、全体に比してどの程度の割合の生徒に対して影響を与えることができるのか、そして選択する課外活動の種類によって影響の度合いは異なるのかについても明らか

にすることが必要であると考えられる。さらに、キャリア選択を行った結果、それが持続的に影響を与え続けているのか、あるいは数年で職種変更を行っているのかという卒業生に対する事後調査を実施することも、課外活動の影響力を知る上で有用になろう。

## 5. おわりに

本稿では、独立学校における課外活動に焦点を当てて、当該校における課外活動の範疇について整理した。また大学への「進学準備校」としての役割を果たすようになってきた現在の独立学校において、課外活動が、どのような今日的意義を持つものであるのかについて捉え、検討してきた。扱った学校はザ・ナインの名称で知られる独立学校のいわば代表校である。

課外活動は、日本の「特別活動」に類似する部分も有するが、比較教育学的視点において、概ね似て非なる存在として解釈することができる。特別活動は、文部科学省によって規程され、学習指導要領において、その内容や特徴、目標等が明記されている。一方で、課外活動は英国のナショナル・カリキュラムにその定義はなく、ナショナル・カリキュラムの踏襲義務のない独立学校においては、なおさら各学校が独自の規則の中で捉えているものと考えられる。各校は非アカデミックなプログラムの位置づけで芸術関連、スポーツ関連、クラブ活動関連、コミュニティサービス、国内外における研修やイベント等、多岐に亘る課外活動を広範囲にわたって展開していることが明らかとなった。

また、実際にどのような活動がいかなる方針によって展開されているかについて、ザ・ナインの中でも面接調査を行った3校の情報をもとに、具体的な詳細についてまとめた。各校とも教育方針に則って教育が行われると同時に、いずれの学校も非常に選択肢の多い課外活動を提供しており、教育方針通りアカデミックな教育に力点を置きつつ、課外活動についても積極的に取り組んでいる現状を把握することができた。

しかし、アカデミックなカリキュラムと課外活動を両立させるという観点や、双方の要素をバランスよく取り入れた教育を提供することが肝要であるという考え方から、ともすれば進学に必要な「アカデミックな科目」を重視することは、「課外活動」の遂行と対峙するものとして、両者を二項対立の関係で捉えてしまうように思われる。ところが実際には、大学進学にとって、課外活動は大きな意味を持つものであり、大学進学に有益なものであるということが明らかとなった。そして、どのような活動を選択するかについては、大学進学のみならず、その後の人生においても将来を決定づける重要な要素を包含したものであるという示唆を得た。

総じて、大学進学がますます重視されるようになってきている昨今において、課外活動が果たす役割や意義は大きいものであると言える。活動の種類によっては、資格取得が可能なものもあり、課外活動が進学に対して有利になる存在であることが確認できた。また、課外活動の実施が、その後試験の成績を引き上げる結果になることが明らかとなった。そして、課外活動の提供数が多い学校における生徒の成績が良好である点、さらに大学受験において、履歴書や面接の場面で課外活動が自己PRになるという点についても把握できた。

これらの結果から、進学重視の傾向に付随して、多様な課外活動が提供されることの意義が高まり、進学・人間形成双方の観点から課外活動の重要性を改めて見直すことが肝要になってくる



ものと思われる。またその過程の中で、現在我が国においても注目されている高大接続の問題を解決する視点を養うことができると考えられる。

なお、面接調査を実施した学校をはじめとするザ・ナインが、第4節で明らかにされた調査結果について把握しており、それを踏まえて「大学進学に資する活動」という視点で課外活動を捉えていたか否かは定かではない。しかし、第4節で言及した調査結果について、ISC調査部長の報告は注目に値する。すなわち、267の共学校、187の女子校、54の男子校における計12,551のアクティビティを分析した結果、アクティビティとテスト結果の相互関係は、選抜制の学校か否かに関わらず全ての種類の学校において当てはまっている、という結果である。なぜなら、本稿で扱った学校群が独立学校を代表する存在であるため、本稿の主張や結論がより平均的な独立学校を例にした場合には、参考にならない、あるいは比較できないという批判がでる可能性が否めない。ところが、それに対応できる汎用性の高い結果が得られたからである。すなわち、第4節で言及した研究結果は、調査対象となる独立学校の母数の多い分析結果において、どのような学校においても同様の傾向が窺えるという結論を導いたものであり、課外活動の有効性が、より顕在化した結果となって表出したと考察できるからである。

ただし、ISCの管轄する独立学校は2014年度現在、連合王国全体で1,257校を数える<sup>23</sup>。その中からバーナード氏の報告に挙がっている調査対象校は合計508校であり、全体の半数未満である。本調査から得られた結果が、他校によって実施された場合にも当てはまるのか否かについては、同調査を扱った資料の限界性を示すものと言えよう。

最後に、課外活動に対する弊害については本稿で扱ったいずれの資料でも論及されておらず、また面接調査においても伺うことがなかった。今後は課外活動の負の側面についても留意し、研究の精緻化を図っていきたい。

表2 ウェブサイトにおける各学校の課外活動の表示方法

学 校 名	大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
ウィンチェスター校	Education	アクティビティ (DofEやYEP (Young Enterprises Programme) を含む学外でも行われるような大規模な活動)		DofE = The Duke of Edinburgh Award; エジンバラ公アワード YEP = Young Enterprises Programme (青少年のための起業体験プログラム)
		ソサエティ & クラブ (クラブ活動)		
		スポーツ		
	Community	コミュニティサービス (福祉活動・慈善活動、等)		
イートン校	Curriculum	アート (美術)		
		ドラマ (演劇)		
		ゲーム (チームスポーツ)		
		音楽		
		ソサエティ (クラブ活動)		



学 校 名	大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
セントポー ルズ校	Daily life	ソサエティ&アクティビティ		
		Sports		
	The arts	アート		
		ドラマ		
		音楽		
シュルーズ ベリー校	Sport (holi- day course 含)			
	Beyond the Classroom	音楽・芸術イベント告知		
		音楽		
		ドラマ		
		週末のアクティビティイベント		
		サードフォームアクティビティ		
		アウトドアウィーク		
		DofE等のアクティビティ		
		CCF (軍事教練)		
		海外研修		
		クラブ&ソサエティ		
		スキューバダイビング		
		コミュニティサービス (年少 者、ホームレス、社会的弱者の サポート支援)		
		チャリティ委員会		
		(その他)		
ウェストミ ンスター校	Activities	スポーツ		
		音楽		
		ドラマ		
		アート		
		交換留学		
		国内外研修		
		Beyond subject choices		シックスフォーム生の ための講演会予告や長 期休暇の職業体験、大 学進学に有益なアカデ ミックなソサエティの 紹介
マーチャ ントテイラ ーズ校	Sport			
	Activities	コミュニティサポート (高齢 者・障がい者・年少者のサポ ート支援)		
		CCF		
		DofE		

学 校 名	大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
マーチャントテイラーズ校	Activities	音楽		
		ドラマ		
		クラブ&ソサエティ		
ラグビー校	Boarding School life	スポーツ		
		音楽		
		クリエイティブ・アーツ（創作芸術）	芸術祭（プレイ（芝居）・ミュージカル）	
			シアター（演劇）	
			視覚芸術（ビジュアルアート）&デザイン	
		木曜午後のアクティビティ	コミュニティ活動（高齢者・年少者の・チャリティショップのサポート）	
			CCF	
			DofE	
		海外研修		
ハロウ校	Outside the classroom	音楽		
		ドラマ		
		視覚芸術		
		スポーツ		
		アクティビティ		クラブ活動を指す
チャーターハウス校	School life	アート（芸術）		
		文化		
		音楽		
		スポーツ		
		シアター（演劇）		
		Extra curricular（課外活動）	月曜の活動（CCF、PSHE）	
			クラブ&ソサエティ	
			CAS（Creativity, Action and Service）	Creativity（美術、音楽、演劇を含むあらゆる創作活動）
				Action（労働体験、スポーツ活動、環境保全活動、EofD挑戦、等）
				Service（ボランティア活動や高齢者・年少者に対するサポート支援、等）
				上記3分野を50時間こなす。

学 校 名	大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
チャーター ハウス校	School life		学外研修	CCFおよびDofEあるいは学校オリジナルの代替プログラム)に挑戦。その他海外研修についての説明有。当該校は2年生全員がEofDのシルバーメダルに挑戦必須。

(出典：9校のウェブサイトをもとに筆者作成)

### 【付記】

本稿におけるインタビュー内容の一部は、平成25-27年度(2013-2015年)科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「英国パブリック・スクールにおける『リーダーシップ教育』の日本モデルの研究」(課題番号25590242 研究代表・秦由美子、広島大学教授)における研究分担者としての成果に基づくものである。

- 1 本稿では、特に言及しない限り、英国はイングランドを意味するものと定義する。また、パブリック・スクールとは、独立学校(インディペンデント・スクール)の一部を指す学校群のことである。その定義は様々であるが、独立学校の中のどの学校をパブリック・スクールと位置づけるかについては、先行研究の中で研究者や専門家がそれぞれ定義を行ってきている。

例えば、パブリック・スクールの歴史を体系的にまとめているオギルヴィ(Ogilvie, V.)は著書の中でそれらの学校の特徴をまとめ、①裕福な人たちのための高級学校、②学費が高い、③地方的でなく英国全土から生徒が集まる、④ほとんどが寄宿学校である、⑤国や地方からは独立しているが財産が私的に所有、運営されているわけではない、とした上で明らかにパブリック・スクールであっても上記5項目を満たしていないところもある、と書き添えている(Ogilvie, V., *The English Public School*, London: B. T. BATSFORD LTD. 1957. pp. 7-8.)。また英国教育の研究者でパブリック・スクールにも詳しい竹内は、「主として寄宿制で、授業料が高く、豊かな階級の子弟を全国規模で集めている私立中等学校」と定義している(竹内洋『パブリック・スクール：英国式受験とエリート』講談社、1993年 104頁)。

これらの文献から、パブリック・スクールを「社会通念的に有名で、多くは寄宿生を受け入れ、学校自体が裕福であり、また在籍する生徒も裕福な者が多い独立学校の代表校」と定義づけることにする。

- 2 独立学校の割合については、英国政府の統計を元に筆者が算出。

ALL SCHOOLS: NUMBER OF SCHOOLS AND PUPILS BY TYPE OF SCHOOL

January each year: 2002 to 2012, England (Table 2aを参照)

[https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/167509/sfr10-2012.pdf.pdf](https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/167509/sfr10-2012.pdf.pdf)

- 3 2014年度の独立学校の授業料に関しては、独立学校委員会(Independent Schools Council: ISC)発行によるISC Census2014、20頁を参照(2014年1月公開)。学費については、寄宿制学校における寄宿生および、寄宿制・通学制を合わせた通学生の平均授業料を参照。Censusでは一学期分の授業料がポンドの額にて記載されているため、それぞれ3倍にした金額を年額として表記し、日本

円に換算の上、表示した。年間授業料は、寄宿生が年額約504万円、通学生でも年額約223万円にのぼる。(1ポンド=175円で換算、小数点以下は四捨五入のうえ切り上げ)。

また、注4で言及するザ・ナインの学費の年額平均をISCのウェブサイトの情報に基づき、同様の計算にて算出すると、それぞれ寄宿生=約503万円、通学生=約391万円になる。

<http://www.isc.co.uk/find-a-school> (last accessed 05/12/2014)

- 4 ザ・ナイン、すなわち当該校9校について学校形態別・年代順に分類すると次のようになる。  
( )内は設立年度。

学校形態	学 校 名
完全寄宿制	ウィンチェスター校 (1382年)、イートン校 (1440年)、ハロウ校 (1572年)
一部通学制	シュルーズベリー校 (1552年)、ラグビー校 (1567年)、チャーターハウス校 (1611年)
一部寄宿制	セントポールズ校 (1509年)、ウェストミンスター校 (1560年)
完全通学制	マーチャントテイラーズ校 (1561年)

- 5 2013年度現在、9校のうちで最も大学進学率が低い学校がイートン校の96%、最も高い学校がマーチャントテイラーズ校の100%である。具体的な進学率については、以下の通りである。

進 学 率	学 校 名
100%	マーチャントテイラーズ校
99%	ウィンチェスター校、セントポール校、ウェストミンスター校、ラグビー校、ハロウ校、チャーターハウス校
98+ %	シュルーズベリー校
96%	イートン校

(出典：各学校のウェブサイトおよびGuide to Independent Schoolsを参照の上、筆者作成)

Guide To Independent Schools, <http://guidetoindependentschools.com/> (last accessed 05/12/2014)

なお英国パブリック・スクールでは伝統的な進路である軍務機関への従事者も若干名おり、本進学率には当該生徒のデータも含む。

- 6 'EXTRA-CURRICULAR ACTIVITIES Adrian Dangar confirms that the traditions of beating, keeping, shooting, fishing, beagling and ferreting are thriving in Britain's public schools', *Country life*. VOL 198; PART 2, pp. 46-49, London: IPC MAGAZINES, 2004.
- 7 Shulruf, B., 'Do extra-curricular activities in schools improve educational outcomes? A critical review and meta-analysis of the literature', *International review of education*. VOL 56; NUMBER 5-6, pp. 591-612, Berlin: Springer Science + Business Media, 2010.
- 8 概要の代表的なものとしてOgilvieを、随筆の代表としてMarstonの文献を挙げる。  
Ogilvie, V., *op. cit.*  
Marston, S. L., *The public schools from within: a collection of essays on public school education / written chiefly by schoolmasters*, London: Sampson Low, Marston & Company Limited. 1906.
- 9 それぞれ以下の文献に、独立学校における課外活動の一環として、スポーツの観点から当該校について詳述されている。  
鈴木秀人『変貌する英国パブリック・スクール：スポーツ教育から見た現在』世界思想社、2002年。  
阿部生雄『近代スポーツマンシップの誕生と成長』筑波大学出版会、2009年。
- 10 National curriculum in England: secondary curriculum (Published in 16 July 2014) を参照。key stage 3 (11-14歳) およびkey stage 4 (14-16歳) における教科を列挙。
- 11 英国の進学に関して、試験としては、GCSE (General Certificate of Secondary Education : 中等教育

修了一般資格)試験とGCS・Aレベル (General Certificate of Education, Advanced level: 大学入学資格上級試験。単純にAレベル試験とも呼ばれる。)が一般的である。後に詳述するが、前者は、義務教育修了時の16歳時点で受験する卒業資格試験であり、後者は、一般的に、その後大学進学のための準備段階であるシックスフォームで2年間学んだあと、18歳時点で受験する資格試験である。これらの試験は、在籍する中等教育段階の学校、あるいは志望する大学が実施するのではなく、大学入学試験協会 (Examination Board) と呼ばれる、学外の非営利団体である試験機関が実施する。

- 12 エジンバラ公アワードについては、イギリスでは非常に親しまれているが我が国では知名度が低い。参加対象者の条件は14-24歳であるということのみ。レベルは三つ 金賞、銀賞、銅賞があり、自分の能力に合わせて挑戦する。突破するセクションとして、金賞は5つ、銀銅は4つが用意されている。それぞれ、ボランティア、身体、技能、遠征、そして金賞はそれプラス、宿泊というセクションがプラスされる。金賞のコースを達成すると、セントジェームズ宮殿その他で、エジンバラ公あるいはウェセックス伯から賞を授与される。

自分で決めたプランに沿って遂行する。DofE賞のリーダーの承認を得てステップを踏んでいく。以下は各セクションの内容。

- ボランティア (Volunteer)
  - フィジカル (Physical) 何でもスポーツやダンス等、組織に入って上達すればよい。オリンピック級の能力向上などは求められていない。
  - スキルズ (Skills) 美術品作成、楽器演奏、演劇、動物の世話、映画作り、菜園作り、サイエンステクノロジーなど
  - エクスペディション (Expedition) 旅行。単なる旅行ではないが、徒歩、自転車、カヌー、馬、車いす、などどのような手段で実施してもよい。また場所も国内外どこでもよい。旅行プランをDofEのリーダーによって承認されたら実行できる。途中、野鳥の観察きこの類の観察、星座のカウント等タスクは多い。通常4-7人のグループで実行し、それぞれに写真やビデオの記録係やチームリーダーなどの役割がある。自転車とカヌーの場合は8人で実行。旅行後には記録したものと同時にプレゼンテーションを行う。期間は一泊二日から。例えば、銅章はわりと都会のキャンプ施設に泊まって終わり。一方金賞は、4日間、60マイルをハイクして、3晩を荒地でキャンプするというもの。
  - レジデンシャル (Residential) 4泊5日の期間に、他の参加者とアクティビティを共にする。スノーボードをスコットランドで習ったり、子どもたちのキャンプを手伝ったり、ナショナルトラストを手伝ったり、都市リサイクル計画に携わったり、エコ活動、自然保護活動、フランス語、ダンスを習得、プログラミングを学んでウェブ開設等色々。しかし、これは他のメンバーもDofEの参加者というわけではないプロセスとしては、準備、訓練、活動、評価の四段階。(DofEのウェブサイトを参照。http://www.dofe.org/ (last accessed 11/07/2014))
- 13 シュルーズベリー校において、美術に関する活動がそれほど行われていないという点については、ウェブサイト上からも読み取れるが、同校へ訪問調査を行った際にインタビューをした生徒からも同様の発言が出た。
- 14 面接調査を実施した3校について、下記の日程で訪問し、以下の対応者に面接した。

訪 問 校	訪 問 日 時	応 対 者
ハロウ校	2013年6月5日	教務主任
シュルーズベリー校	2013年6月6日	学長／フランス語主任／シックスフォーム生4名
ウィンチェスター校	2013年6月12日	元副学長



- 15 「 」内は応対者による発言である。
- 16 同上。
- 17 2007-14年度の卒業生についての調査によると、ウィンチェスター校の卒業生はアメリカの大学への進学者も多く、IVYリーグを中心とした米大学進学者とオックスブリッジへの進学者を合わせると、卒業生の約45%を占める。また、オックスブリッジのみでは約33%の割合で両大学に合格している。Winchester College, 'Exams and Universities' <http://www.winchestercollege.org/exams-and-universities> (last accessed 29/09/2014)
- 18 ウィンチェスター校では、生徒の選抜段階から知的な生徒を厳選しているということであるが、実際に入学した生徒に対して、「国内にはオックスブリッジ以外の大学も進学先として存在すること、またアメリカの大学等も進学先として考慮できるという選択肢を示さなければならないほど、両大学への進学を熱望する生徒が入学者の中に多い」という発言があった。
- 19 Lipsett, A., 'Extracurricular activities boost exam results', [theguardian.com](http://theguardian.com), 3 June 2009. 本段落および次の2段落の内容はガーディアンの同記事によるものである。なお、同記事に関して記述している箇所において、「 」内の記述事項は、記事の原文を直接翻訳した部分である。
- 20 ISCの歩みは、独立学校合同委員会として1974年に、校長会議や独立学校理事会 (Association of Governing Bodies of Independent Schools; AGBIS)、独立学校会計協会 (Independent Schools' Bursars Association; ISBA) などの主な理事会、委員会、会計団体によって組織されたことに始まる。その後、1998年に独立学校委員会として再構成され、再度2002年に主要機能の再編が実施されて現在に至る。
- 21 注19を参照のこと。
- 22 Walmsley, J., 'Extra-curricular activities are worth the extra effort', *The Telegraph*, 13 September 2013. なお、テレグラフの同記事に関して記述している箇所において、「 」内の記述事項は、記事の原文を直接翻訳した部分である。
- 23 Independent Schools Council, *Annual Census 2014*, 'Foreword' p.4.